

「印象派の絵はどのようにして日本に来たか」「印象派の絵はどのようにして日本に来たか」

講師：宮崎克己（石橋財団ブリヂストン美術館学芸課長）

プロフィール

1952年(昭和27年)埼玉県に生まれる。東京大学、パリ大学などで西洋美術史を学ぶ。群馬県立近代美術館を経て、1990年よりブリヂストン美術館に勤務、現在副館長。東京大、青山学院非常勤講師を歴任

著書

「印象派の魅力」共著1990年 同朋社「ジャポニズム入門」共著2000年 思文閣

「ゴッホ」訳書1991年 日経出版 「ルノワール」訳書1992年 岩波書店

企画展覧会

「モネ展」1994 「ルノワール展」2001年 ブリヂストン美術館にて実施

専門は、セザンヌ、モネ、ルノワールなどフランスの印象派、ポスト印象派、日仏美術交流と美術館論

主催：杉並ユネスコ協会

日時：2002年3月3日

会場：ブリヂストン美術館ホール

今日は、ようこそおいでくださいました。宮崎でございます。

ブリヂストン美術館は、この1月に50周年を迎えました。1952年1月8日に開館しました。昭和で表現した方が分かり易いかも知れませんが、今日は主として西暦で言わせて頂きます。先程、会長さんがお話しになったように、杉並ユネスコ協会も50年だそうで、これも大変なもんだなあと感じました。

拝見しますと、年配の方も多いようで、50年前とまでは言わないまでも、たぶん、30年前とか20年前とかに、このブリヂストン美術館にいらしたことがある方も多いんじゃないかと思えます。

2年程前に内装をすっかり直しましたので、趣が違います。外装も何年か前に直しましたので違ってはいますが、基本的には、建物は50年前、やはり同じ日に落成しました。何度か美術館にいらした方、今は50周年記念ということもありまして、良い作品をすべて一番良い場所に展示してございますので、「ああ、また、これに出会えた」というような思いをなさる方、多いんじゃないかと思えます。後では是非、ゆっくりとご覧下さい。

1 美術作品には人々の想いが堆積している

美術作品というのは、例えば、100年前に作られた物でありますと、その後、色んな種類の、記憶と言いますか、それを愛した人、それを想っていた

人、それに影響を受けた人、と色々な人たちが周りにいまして、色々な記憶が、その周りに、「年輪」のように折り重なっていくもんなんですね。で、私たち普通はそういう事を無視して、それを作った画家とか彫刻家にストレートに肉薄しようとはしますよね。美術作品というのは、物としてそこにあって、例えば、ルノワールの絵は、ルノワールが描いた時と比べて、そんなには変わっていない。ですから、本当に直接的に作家と対話しているような気がする。それが美術作品の「醍醐味」なんですけれども、一方で、そのように物として存在していますと、100年経つ間にはその周りに色々な人がいて、それに感動した人が何万人、何100万人といて、それぞれが小さな物語を作って、それがその作品の周りに、堆積していくものなんです。時には、その作品そのものよりも、作品の周りにいた人たちの小さな物語の方に目を向けてみるのも、面白いものなんですね。考えてみれば、我々だって、その小さな物語を作っている。20年前、30年前どうだった、お母さんに手を引かれて見に来たけれども、その時、母はこの絵に感動していた、というような思い出は、やっぱり自分にとっては非常に大事なものなんです。あるいは、あの小林秀雄がこの絵についてこう書いた。それを読んで感動した。それを読んで、「あー、この絵はこういう絵なんだ」って分かった、という風に美術作品直接ではないのですが、それがどういう風に受け入れられてきたかということも、考えてみると面白いものです。

今日は「印象派の絵はどのように日本に来たか」というお話で、印象派そのものではなくて、印象派の絵を日本にもたらした、情熱的なコレクターたち、最終的にはこの美術館の創立者である石橋正二郎にいたるお話をしたいと考えております。

このブリヂストン美術館は設立50年を迎えましたが、私がこの職場に来たのは12年ほど前で、その前には群馬県立近代美術館におりました。ブリヂストン美術館に来まして、私はフランス近代絵画が専門ですので、本当に自分の専門分野の物がたくさんあって、非常に嬉しかったのですが、このブリヂストン美術館のコレクションというのは、非常にユニークだなあ、と、ある時から思い始めました。もちろん、ユニークなだけでなく、質的にも量的にも良い物を持っている。現在でも、たぶん、印象派と19世紀フランス絵画、あるいは20世紀前半のマティス、ピカソとか、あるいは日本近代洋画とかまで含めると日本のその分野では、たぶん屈指の美術館であるに違いないんです。

でも、考えてみますと、例えばモネは、ブリヂストン美術館が開館した時には、東京では他には全然見られる所がなかった。7年後に国立西洋美術館が出来て、モネの絵がたくさんあります。で、倉敷には大原美術館が前からあった。その後、どんどん美術館が増えて、例えば、モネ一つとってみると、関東地方の茨城、栃木、群馬、埼玉、あるいは東京富士美術館とか、それから新潟、静岡、そういう各県立美術館、あるいは私立美術館にそれぞれかなりのモネが入っていますし、大きなコレクションで言うと、最近出来た、アサヒビールが経営している京都の大山崎山荘美術館には、物凄いモネのコレクションが

あります。それから、今年箱根に出来る「ポーラ」という美術館、ここも物凄いモネのコレクションを持っています。ですから、ブリヂストン美術館のコレクションは、相変わらず良いということは言えますけれども、段々目立たなく、突出してはいなくなってきたといえるでしょう。そのことは非常に良い事で、それだけ良い絵が増えたってことなんですけれども、そういう中で、私はこの美術館に来て、質や量があるっていうだけではない良さがある、非常にユニークだなあと思うようになってきたんです。そのユニークさってというのは何か、一言で言いますと、この美術館のコレクションによって、まさに印象派、あるいは19世紀フランス絵画、西洋絵画がどのように日本にもたらされたかということをお話することが出来る、言い換えますと、この美術館以外では、それはあんまり上手く語れないという、そういう美術館なんです。

明治以来の日本人の多くのコレクターたち、あるいは美術愛好家たちの西洋美術を見る眼差しが、そのすべてが沈殿した、その「遺跡」とでも言いますか、そういう物なんです。ですから、良い絵があるというだけではなくて、その西洋に対する日本人の思いが結晶している、そういう文化的な意味のあるコレクションなんだなあ、ということが分かってきました。しかもその中に随分ドラマがある。

2 コレクター石橋正二郎の決意

で、今日はそのドラマについてお話ししたいんです。タイトルは、「印象派の絵はどのようにして日本に来たか」となっていますが、実はもう少し広く19世紀初めの頃、バルビゾン派ぐらいからセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンとか、その辺の世代まで、要するに、19世紀絵画、フランス絵画全般の話になると思います。ただ、その中でも、印象派が一番中心になります。日本について、そのコレクションが出来たかと申しますと、劇的にコレクションが出来た数年間があります。

一つは1945年、昭和で言うと20年ですが、1945年から52年の5年あまりです。その間に、この石橋正二郎の西洋美術コレクションがほぼ出来ました。本当に劇的に出来た。もう一つはちょっと古くなりますけれども1918年、大正7年から1923年ですね、これも6、7年間に劇的に日本に西洋美術のコレクションが出来ました。今日は、その二つの時期についてお話しします。

まずは、お気づきと思いますが、最初の時期、1945年は第2次世界大戦が終わった年、もっと素直に言うと、日本が戦争に負けた年です。1945年の8月15日に戦争が終わったのですが、正にその年に石橋正二郎の西洋美術コレクションが始まって、5、6年の間に出来上がってしまったのです。それからもう一つの1918年から23年ですが、1918年は第1次世界大戦が終わった年です。で、その年をもって、何十人かの日本人のコレクターが西洋美術のコレクションを作り始めた、ということです。今日のお話は戦争に大きく関わっています。戦争というよりも戦争の結果としての経済状況、それから、税制に非常に

関わっている話になります。

私がこの美術館に来て、ある時期に、何かこのコレクションに関することが集中しているなあとモヤモヤと思ひまして、それをどうしても確かめてみたくなった。そして、随分実証的な調査をしたんです。聞き取り調査とかですね、昔のコレクターの遺族に片っ端から電話を掛けてみたり、会いに行ったり、遺族がどこに住んでいるか分からない時には同じ名前の人の電話番号を片っ端から掛けていって、そしてついに突きとめたこともあります。あるいは、昔その人が住んでいた大阪のある所では、周りをウロウロして、もう住んではいないんですけども、昔から続いている酒屋さんに聞いてみたら、「その人はどこそこに引っ越しましたよ」なんていうようなことがあったり、あるいは昔の新聞のスクラップ帳があって、それは非常に面白くて、それを片っ端から何十年分かを何ヶ月かかけて読んでみたりしまして、それと、ブリヂストン美術館にも、そういう資料の蓄積が随分あるんですね。で、ほぼ分かったんですね。これについては随分前から、何回か小さい展覧会で発表しています。1995年に「ルノワールと日本の画家たち」ということで、ルノワールの日本人コレクターについて。それから1997年に「西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち」という小さな展覧会。それから、その総まとめとして、今回の「コレクター石橋正二郎」というのがあるんですね。これを最後に取っておいた、というようなところなんです。ですから、数年がかりの私だけではなくて、同僚を含めた調査の結果です。

まずは、この石橋正二郎について、ちょっとお話しします。先程申しました通り、石橋正二郎は昭和20年、1945年に西洋美術のコレクションを始めた。もしかすると、その前年か前々年くらいに2点とか3点ぐらいの西洋美術の作品を買っていたかもしれない。ただ、それはちょっと確認が難しいんです。しかし、1945年にはたしかに凄い勢いでコレクションを始めて、そして、この美術館が出来たのは1952年の1月ですから、実質的には1951年の末までに、つまり5年間に50数点のモネ、ルノワール、セザンヌ、マティス、ピカソ、ルオー、あるいは、ロダン、ブールデル、というような、かなりの名作を買い集めて、そこで美術館をオープンしました。その勢いというのは、その後3、4年は続いて、1955年ぐらいまでの、要するに10年間ほどが彼の西洋美術コレクションの急激な成長期だったんです。

なぜ、そんな事が出来たんだろうか、と、私本当に不思議でならなかったんです。そのことを、今日の講演の中で半分ぐらい時間を使ってお話しするんですが、一つの結論は1945年の敗戦の時をもって、コレクションを作りたい、美術館を作りたいと思ったのではなかったんですね。もっと前から「助走期間」があったんです。彼がコレクションを始めたのは1930年、昭和5年くらいのことです。まずは日本近代洋画を買い始めました。

彼は福岡県の久留米市出身で、同じ久留米出身の青木繁、坂本繁二郎という画家辺りからコレクションを始めるんです。しかし、石橋正二郎っていう人はコレクションを始めた時から美術館を作りたいと思っていたという、すごく社

会貢献意欲の強い人だったんですね。コレクターには色々あって、自分の趣味のため、自分の生活空間を飾るために絵を集める人も多いんですけども、そうじゃなくて、最初から、あるいはかなり初期から美術館を作りたいと思ってコレクションを進める人っていうのは、過去にも何人かいた。後でお話しする松方幸次郎とか、大原孫三郎とかもそうなんですけれども、そういう人たちのコレクションは、やはりコレクションの速度が随分違ったり、あるいは、その視野が違ったりするものなんです。そして石橋正二郎もまた、一番最初からコレクションを美術館にしたいと思っていた。社会貢献意欲の凄く強い人で、例えば、その2年前に久留米市にお医者さんの学校を作りたいという話が起きた時に、自分で病院兼学校の土地、大きな建物すべてを寄付するというようなことをやりました。この辺で、スライドに移りたいと思います。

これは、50年前のブリヂストン美術館の情景ですね。いかがでしょうか、当時はみんなこんな風に学生帽なんかかぶっていました。これが、石橋正二郎。で、これが、今お話ししている、九州医学専門学校なんです。こんな立派な建物をポンと寄付してしまうような人だったんですね。これは1928年のことなんですけれども、彼がコレクションを始めたのも同じ頃、それと、彼がタイヤ生産の事業を始めたのも1931年ということで、実に同じ頃なんです。彼はそれ以前に「地下足袋」という物を作っていて、それで大当たりをして、かなりの財を成していたんですけども、「地下足袋」から思い切った転身でタイヤを作ろうと。「地下足袋」というのは「足袋」の底にゴムを取り付けている物ですので、ゴムの技術を多少持っていたということがあって「これからは地下足袋の時代じゃない、タイヤの時代だ」と思ったんですね。で、そういう、物凄い冒険をしようとしていた時に、同時に美術コレクションを始める。同時に医学専門学校の土地、建物も寄付しちゃう、っていうような、とても複眼的な視野を持っていた人なんです。その彼が美術館を作りたい、それから、もう一つは西洋美術が欲しいと長年願っていた。彼は大変な「西洋かぶれ」と言いますか、西洋への憧れを持っていた人で、だからこそ、「地下足袋」からタイヤに転身したわけですが、もうこの頃にはお箸ではなく、ナイフ、フォークで食事をしていたとか、もちろん、和服なんかはほとんど着ないで洋服だったとか、自動車を運転していたとか、そんなことがあったんですね。そういう風に「助走期間」があった。1930年ぐらいからずっと「助走期間」があって、美術館を作りたい、それから、西洋美術が欲しいと思っていたんだけど、なかなか、それが実現するような環境が来なかったんですね。ところが、そうこうしているうちに戦争が始まって、そして敗戦。彼はその時にガムシャラに西洋美術のコレクションを始めるわけです。で、その時になってようやく環境が整う。とは言っても彼自身もタイヤの工場、中国なんかにあった工場は、全部接收される。あるいは、戦後になって、ゼネストだとか、随分社会問題がありましたけど、彼の会社でも長期ストライキがありました。あるいは、朝鮮戦争の時でも、見通しを間違っただけで大損をするとか、そんなことをやっている真っ最中に西洋美術のコレクションを進めるんです。それは、戦争で負けて改めて、

国粹主義的だった日本人たちが、西洋に対して目が開かれたっていう事もあるし、それから、未曾有の国家的な危機です。そういう中で、なんとか自分なりの社会貢献をしなくては、というような意欲が、使命感が、その逆境だからこそ、余計、固い決意になったんだと思うんです。そうして、数年間でコレクションを作ってしまう。

さて、そういう彼自身の意欲とか環境が急速なコレクション形成の第1の原因であったのは確かなんですけれども、それが可能になった条件というのは、実は彼自身ではなくて、もっとずっと、社会・経済・文化的な事であったのです。まず、何よりも、石橋正二郎がその数年間で買った作品のほぼすべてがすでに国内にあった物である、ということなんです。それが、不思議なことと言うか、すでにその時におそらく何千点という単位の西洋美術の作品が日本に入り込んでいたということなんです。戦争直後は、外貨の持ち出しは非常に制限されていて、石橋正二郎は海外に旅行したこともあったんですが、その時に買ってこれた物は、土産物みたいなものでしかなかった。彼が買った西洋美術の主要作ほぼすべては、戦前に日本に入っていたということなんです。それでは、それらの絵は、いつ日本に入ってきたのかという話に移ります。

3 西洋美術コレクションの激動期・その1 (1918 - 1923)

1) 林忠正コレクション

先程、1918年から23年と申しましたけれども、その時に集中的に入って来る。ただ、それ以前、誰が一番最初だったかと言うと、これは1890年代にさかのぼります。1890年代というのは、明治中頃になるんですが、林忠正という人がいました。林忠正は、日本人で唯一、印象派のモネとか、マネ、ピサロ、ドガなんかと友たち付き合いをした人なんです。パリに住んで、日本から大量に美術工芸品を輸出した画商だった。昔の感覚で言うと、大事な文化財を流出させた張本人、「国賊だ」なんて言われたことすらあるんですけれども、今の感覚だと、パリに実際に住んで、流暢なフランス語で、印象派とか他の向こうの日本美術に興味を持っているコレクターやインテリに、「この絵はこういうもんだよ」というようなことを的確に説明出来る、唯一の人間、日本文化のスポークスマンだったんですね。印象派たちとも、かなり親しい付き合いをした。彼は1870年代からパリに住んでいたんですが、1890年代くらいになって、日本から持って出るだけではなくて、西洋美術を日本に持ち帰って、そして、美術館を作りたいと思ったんですね。日本の画家たちに参考になるような物を集めて、そして美術館を作りたいと。そういうことで、合わせて、数えようにもよるんですが、600点ぐらいの西洋美術作品を持って帰る。600点と言っても、版画がその半分以上を占めているんですが、それでも、百数十点の油絵、パステルとかデッサンとかがあって、その中にモネ、ルノワール、ドガ、ピサロ、マネ、そういう画家たちの絵が入っていたんです。彼は1906年に

死にますが、結局、日本で美術館には出来なくて、本当は国に寄付する気もあったようなんですけども、それが認められなくて、彼の死後、アメリカでオークションにかけられて、ほとんどが散逸してしまう、というような事がありました。彼のコレクションはあまりにも早かった、という事なんですね。今、日本に残っているのは、たとえばこのブリヂストン美術館にある、林が一番大事にした中の一点、コロアの《ヴィル・ダヴレー》、今、上に掛かっています。1891年のある日、パリのポルティエ画廊で買ったという領収書が残っています。

林忠正のコレクションは、あまりにも早かった。これがオークションにかけられたのは1913年のことで、後に述べる「白樺派」たちは、それをなんとか買い支えて、日本に留めようと努力したんですけども、本当にタッチの差で逃がしてしまって、アメリカに出てしまったのです。その後は大コレクターがなかなか現れません。日本に印象派を伝えた最初の人には林忠正ですが、それと並んで早いのは画家たち、あるいは芸術家たちなんですね。例えば、梅原龍三郎がフランスに渡って、1909年、ルノワールに会いに行く。そして、続いて山下新太郎とか何人かが会いに行ったりします。大体その頃から日本に印象派という物が本格的に紹介されるようになってくる。今お見せしている《水浴の女》は山下が梅原に連れられてルノワールに会いに行って、これは1909年のことですが、ルノワールから直接買った作品です。これも今、ブリヂストン美術館に入っています。そういう風に、ちらほらと画家たち、芸術家たちが美術作品を持って帰るんですけども、彼らはそんなに大金持ちではないので、大コレクターになるってことはないんですね。そして、いよいよ第1次世界大戦が1914年に始まります。この第1次大戦では、日本は連合国側に入って、しかも、日本周辺ではあまり大きな戦いはなかったんですね。主戦場がフランス、ドイツ、あるいはベルギーとかその辺りになった。大変な戦争で、毒ガスとかもあって何百万人が死んだという、そういう戦争ですね。ただ、その間、大変な軍需がありまして、日本や、戦争に巻き込まれなかった国は、凄い経済成長を遂げます。例えば、戦争は1914年に始まりますが、1910年の日本の国民総生産が29億円であった。で、戦争は1918年に終わりますが、1920年の国民総生産が112億円、つまり4倍ぐらいになるんですね。のみならず、高額所得者の数が物凄く増えて、当時で言うと5万円以上というのが高額所得者だったようですが、1913年の数字だと約140人。それが、1918年、戦争が終わった時の数字で900人。どういうわけか、その後も増え続けて、1923年には6,000人という数字になります。ですから、実は第1次世界大戦の最中というのは、日本は大変な景気で潤ったんです。造船とか鉄鋼とかだけではなくて、医療品とか、衣料ですね、それらを輸出することが出来た。で、「成金」がたくさん登場したわけですが、1918年に戦争が終わって、そういう需要がなくなると反動不況がやって来るんです。しかし、それでも戦争中に蓄えたお金によって、あるいは、どういう制度が分からないですけども、戦後数年後まで、富裕層が凄い勢いで増えているんですね。そしてもうすでに印象派なんていうのは、日

本のコレクターとか一般にもかなり広まっていた時期なんです。そういう中に戦争で荒廃したフランスに渡って、多くの印象派とか、セザンヌ、ゴッホなんかの絵を買ってくる人がいたんですね。

2) 松方コレクション

その一番代表的な人が松方幸次郎という人で、彼は神戸に本社がある川崎造船所という会社を持っていました。船を造るので、戦争中、たくさん輸出することが出来た。すでに戦争中の1916年にロンドンに渡って、その時から美術のコレクションを始めていたんです。ただ、その時にはイギリスの同時代の、我々がほとんど名前を知らないような作家の物ばかり。それが、戦争が終わるか終わらないかの1918年にパリに移って、それから本格的に美術コレクションを始めます。その頃には、「美術館を作りたい」と決意するんですね。で、物凄い勢いでコレクションを作ります。1918年から、例えば、モネの家を訪ねて直に18点の作品を買うとか、ロダンの作品を数十点まとめて買うとか、凄い勢いで買って行って、たぶん、全部で2,000点ぐらいになったのだらうと思います。今お見せしているのは、国立西洋美術館に入っているモネの《舟遊び》で、松方幸次郎が持っていた物です。同じく、この大きな《睡蓮》もモネから直接買った物です。しかし、実は、このブリヂストン美術館にも松方幸次郎が買った物が15点程あります。例えば、このモネの《雨のベリール》、ルノワールの《少女》、ピサロ《菜園》、マネ《自画像》。ところで今、お見せしました、ブリヂストン美術館に入っている4点の作品は、いずれも1923年に、コペンハーゲンのハンセンという大コレクターから買い取った物なんです。実は、この1923年のものは、松方幸次郎にとってはほとんど最後の購入と言ってもよくて、戦後の反動不況もあって、彼の川崎造船所は随分傾いてしまっていた。最終的に1927年にこの会社は倒産して、松方は結局、美術館を作ることが出来なくて、コレクションは散逸します。今お見せした、ハンセンから買い取った物というのは、元は35点あった。松方は、最初は随分乱暴な買い方をしていたんですけれども、段々目が良くなって行って、この最後にハンセンから買った35点は本当に珠玉揃いなんです。ちなみにこのハンセンという人は何かって言うと、デンマークの人ですけれども、同じように第1次大戦中の1916年から18年にかけて、金が儲かったんでしょ、物凄い勢いでコレクションを作った。しかし、1923年、戦後になって会社が傾いて、そして、まとめて松方にそれを売り渡したわけです。他にもたくさんあったんですけれども、そのうち35点を売り渡した。で、松方の方も、もうすでに事業が傾いていたんですけれども、もう少し頑張っていて、それが4年後に倒産する。ですから、大きな戦争が起こると、大コレクションが幾つも崩壊する。しかしデンマークとか日本みたいな周辺の国では、大儲けする人がいて、その崩壊した物を買って、急激に新しいコレクションが出来ると、ってというようなことがあるんです。ハンセンも松方もそうだったんですけれども、そのハンセンの事業が傾くと松方の

事業が傾くのと、ちょっと時間差があったんですね。その時間差のおかげで、その35点が、ハンセンから松方の手に渡って、その半分ぐらいが、今でも、日本にあるということになるわけです。

3) 雑誌『白樺』

この松方という人が最大のコレクターなんですが、日本のコレクション熱というのは、そういう企業人だけではなくて、当然、芸術家たちにもあった。その精神的な、一番象徴的な物が、『白樺』だったんですが、今お見せしているのは白樺派の中心人物の1人、武者小路実篤がセザンヌの自画像の横で微笑んでいる写真です。このセザンヌの自画像、今、2階に展示してあります。さて1917年、これは第1次世界大戦が終わる前年ですよ。すでに松方幸次郎はロンドンに行っていた。しかしお互いのことは知らない。白樺派は、『白樺』という雑誌を1910年に発刊してから、ずっと出していた。その1917年の秋の号に、武者小路実篤が巻末のエッセイで、短い文章を書いているんです。「誰か日本のお金持ちが西洋の名画を買ってきてくれないかなあ」というような、「そしたら、どんなに素晴らしくて、その買ってきた人も、どんなに名誉になることだろうか」なんていうようなことを、ブツブツと呟くように書いているわけです。ところが、その白樺派っていうのは、本当に楽天的と言うか、理想主義的と言うか、空想的と言いますかね、そこがまあ、彼らの面白い所なんですけれども、そういう風にブツブツ言っているのを書いた次の号で「いや、美術館を作ろうじゃないか」って、武者小路実篤は言い出すんです。で、「美術館を作る計画について」っていう、募金運動を始めます。1口1円で、もし2万口集まるとコレクションだけでなく美術館の建物が出来ると言う計算なんですよ。まあ、ちょっと今の価格で幾らくらいというのは、もう一つ分からないんですけども、1円っていうのは1万円くらいでしょうかねえ。もし、2万口まで集まらない時には、まあ建物は造れないが、作品が少し集まるだろうから、その作品を集めて展覧会をしましょう、と。そういう募金運動を始めます。ところが、これが物凄く反応があって、翌月からどんどん、どんどんお金が集まってくる。毎号、誰が何口っていうのを『白樺』の雑誌に掲載してあるんです。見ると、この人も、この人もっていう感じで、今日から見ても随分有名な人が、たくさん募金しているんです。ただ、さすがに楽的な話で、2万円どころか、ちょっと額を忘れてしまったけれども、かろうじてセザンヌの油絵1枚買えるくらいしか集まらないんです。でも、その間、色々協力者がいまして、たまたまパリに留学する相馬政之助、夏、という二人とも音楽家の夫妻が、パリから、大戦直後ですけれども、こんな絵が売りに出ているっていうような情報を、次から次へとよこして、そして、その相馬の仲介によって、結局、絵が何点か来るんですよ。その代表的な物が、このセザンヌの自画像で、これは白樺派では買い切れなかった。しかし白樺派というのは学習院の卒業生でして、同じ学習院で、『白樺』の同人ではないんですが、友人に細川

護立（もりたつ）という人がいまして、この人は熊本の細川藩、何年か前に細川護熙さんって総理大臣やった、あのお祖父さんに当たる人なんです。この細川護立がそれじゃあっていうことで、これを買取る。そして、同じセザンヌの、これもブリヂストン美術館に入っている《休息する水浴の男たち》ですが、この水彩画も相馬から白樺派に連絡が来て、そして、これは関西の実業家の山本顧弥太という、やはり『白樺』の共鳴者が、それじゃあってことで買取る。それから、これはブリヂストン美術館蔵ではありませんが、ゴッホの《ひまわり》、これも同じ経過を辿って、山本顧弥太が買取る。これは、残念ながら第2次大戦の時に焼けてしまった作品なんです。で、こういう諸々の物が集まって、それに相馬自身のコレクションがあったりして、結局、1921年に白樺美術館展覧会という、小さい展覧会が開かれる。それだけの話ではあるんですけども、つまり、実際に入って来た作品というのは、そんなに多くはないんですが、そういう事は素晴らしいんだ、という事をみんなに伝えて、そして、それに影響されて、自分でもと思ったコレクターもいたに違いないんですね。当時の多くの人たちの語られざる言葉を、彼らが代弁しているわけですね。

4) その他のコレクター

他にも、実はたくさんのコレクターが1918年と23年の間にいました。大原孫三郎、これは大原美術館を作った人で、このルノワールの《泉》は今、大原美術館にあるものです。大原孫三郎は、第1次大戦前にも数点絵を買っていますが、集中的に買い始めたのは1920年以後、23年までのことで、つまり、彼も1920年頃になって、美術館を作りたいと決意したんですね。

他にもたくさんのコレクターがいます。例えば、今お見せしているのは岸本吉左衛門という、大阪の鉄工所経営のお父さんを持つ人なんですけれども、1919年、戦争が終わった翌年にアメリカとフランスに行き、フランスでこのルノワールの《すわる水浴の女》、セザンヌの《水浴群像》、マネの《メリー・ローラン》を買ってきたんですね。そして1920年に、合わせて80点以上の作品、ロダンのデッサンがそのうち60数点占めているんですけども、これを集めて東京と大阪で展覧会を開きました。

あるいは黒木三次という人がいて、大蔵省だったと思いますが、1919年に調査、研究のために奥さんと一緒にパリに渡り、22年に帰って来た。そしてこの奥さん、旧姓で言うと松方竹子という人で、松方幸次郎の姪にあたる人なんです。この黒木夫人の竹子はモネに大変可愛がられましてね、今お見せしている写真の中央にいる和服姿の女性がそうなんです。この左がモネで、この右が大統領をやったクレマンソーですね。モネの左がモネ夫人で、これはモネ夫人の連れ子です。堂々と、こんな真ん中に写っていますけれども、この竹子さんは、モネの家に何回も泊めてもらったというくらいです。モネっていうのは、大変な日本びいきで、ジヴェルニーの今残っているモネの家に行くと、壁

一面、浮世絵が飾られています。そういう事もあって、仲良くなった。で、この竹子が仲良くなって、伯父さんの松方幸次郎をモネに引き合わせたらいいんですね。この黒木夫妻もモネから、例えば、この《睡蓮の池》、これはブリヂストン美術館の作品、同じくこの《黄昏、ヴェネツィア》を直接買い取ってくる。

あるいは、團伊能という人がいまして、これは團伊玖磨のお父さんにあたる人で、三井財閥の大番頭だった人で「血盟団事件」で暗殺された團琢磨の息子です。この團伊能という人は後に、石橋正二郎の美術コレクションに関するブレンになった人なんです。1922年に欧米視察実業団というものがあって、何十人か、実業家が欧米を周った。そして、團伊能はまだ若かったんですが、この人は美術史を勉強して、後に東大の先生になる、美術の専門家だったんですね。行く先々で、実業家たちの買い物をアドバイスしていたらしい。このモネの《睡蓮》はお父さんの團琢磨が買って、後に團伊能の物になった、その旅行の時に買った作品です。

あるいは、このセザンヌの《サント=ヴィクトワール山》。原善一郎という人が、1923年にパリで買った。原善一郎は、生糸貿易で一財を成した実業家で、横浜の三溪園を作った原三溪の息子です。三溪も大パトロンで大コレクターなんです。その息子は西洋美術に目が開かれて、パリに渡って、セザンヌ2点、ドラクロワ2点の素晴らしい作品を買った。ドラクロワの1点は、現在国立西洋美術館にあります。

他にもたくさんの方がいたわけです。今数えてみると、ブリヂストン美術館にあって、戦前に日本人が買ったことが判明している絵画作品、そのうちコローぐらいの世代からセザンヌ、ゴッホぐらいまでの世代のものが54点あります。そのうち30点が、この1918年から23年の間に買われているんですね。他にも、松方幸次郎のコレクションが、ほぼその時期に入るし、大原孫三郎のコレクションが、ほぼその時期に入ってしまふ。つまり、日本に今、大量に残っている作品、重要作品のかなりの数がその時期に日本人によって買われているんです。で、先ほども言いましたように、それはこの時期の日本にたくさんのお金持ちが出てきた、そして、西洋に目が開かれていったということがあるわけなんですけれども、それでは、どうして1923年に終わってしまったかということになります。

1923年、大正12年は、言うまでもなく関東大震災が起こった年です。それが何と言っても大きな原因です。例えば、今お見せしているのは中澤彦吉という人が持っていた作品ですが、中澤はルノワールの亡くなる年、1919年にルノワール本人に会いに行き、その年に描いた作品を買って戻って来たんですが、新聞にも、随分大きく報道された。彼は他にも、ロダンの《考える人》を買ってきて、陶磁器も持っており、1922年に、この大変綺麗な自分のコレクションの画集を出しているんです。ところが、ここに出ている物すべてが翌年、1923年に関東大震災で灰塵に帰してしまうというようなことがありました。

他にもたくさんあるんですね。白樺派は最新号を倉庫に入れていたが、関東大震災で焼けてしまって、それがきっかけとなって、同人を解散します。あるいは、さっき《サント＝ヴィクトワール山》を買った、原善一郎が出てきましたけれども、彼のお父さんの原三溪は、横浜の生糸の倉庫が全焼してしまって、数百万円の損失。それで事業が急激に傾いていってしまうということがありました。それだけではなくて、こういう美術品というのは、「滅びるものだ」という意識が、やっぱりコレクターにとって、随分大きかったんじゃないかなと思います。

のみならず、もっと大きかったのは、その翌年、1924年に政府がこの関東大震災復興のための財源不足を補うために、新しい税金を設けたことです。それは「贅沢品に対する輸入税」で、コーヒーとかお酒にも税金を掛ける、それぞれ税率が違いますが、美術品の輸入に対して100%の税金を掛けるというようなことになるんです。それはもう、大変なことですね、美術界から随分反対意見が出たんですが、結局、その税が出来てしまう。例えば松方幸次郎は2,000点程の作品を買うのに800万円くらいを使ったと言われていています。彼は、1918年からどんどん日本に作品を送っていたんですけれども、それでも、パリのロダン美術館に400点、ロンドンのある倉庫に数百点、というように残っていたんですね。それが新しい税金が出来てしまって、要するに800万円です。買った物を、また日本に持って帰ると800万円近く取られちゃうと。今で言うと800億円くらいかな。そんな馬鹿な話ないですよ。彼はいずれ、こんな悪税は廃れるに違いないと思って、ずっと待っていた。すると、戦争になってしまう。パリに置かれていた物は、敵国財産として没収されてしまう。ロンドンに置かれていたのは戦争直前だったと思いますが、火事で全部焼けてしまう。パリに置かれた物、没収された物は戦後になって、日本政府がかけ合って、そして、一番良い数点は返してもらえなかったんですけれども、残りが返って来て、これが国立西洋美術館になったというわけです。今の感覚だったら、日本政府に返すんじゃないなくて、松方家に返すんじゃないかなって気もするんですが、政府の悪税のおかげでフランスに留まっていた物を、戦争になって、政府が自分の手に入れたということですね。ただ、税金が出来る前に、たくさん日本に持ち込んでいた物、あるいは税金が出来てからも、松方は少し日本に持って来たんですけれども、そういう物が、彼の会社の倒産があって、日本で散逸して、そして、他のコレクターの手に渡って、それが戦後になって、石橋正二郎の手に渡ったという事なんです。

そういう風に、関東大震災、それから税金があった。それからもう一つは、印象派とか、このあたりの絵の値段が物凄く上がったということなんです。それは主として、アメリカが大変な経済成長を遂げて、大小様々なコレクターが、本当に雨後の筍のように現れて、そして彼らの多くが、印象派なんかを狙ったわけですね。すると、印象派の価格が10倍以上に上がる。で、日本人たちはもう手が出なくなるというようなことになるわけです。

4 西洋美術コレクションの激動期・その2 (1945-1952)

それでは、1924年の税金以降どうだったかということですがけれども、日本のコレクターたちは、印象派とか19世紀絵画ではなくて、同時代の美術に目を向けるようになるわけです。当時の同時代というと、マティス、ピカソ、ルオーというような人たちで、例えば、パリに住んだ福島繁太郎なんていう、大コレクターがいたんですね。同時代の美術だからまだ、安かったということなんです。

そういう、戦前のコレクターたち、そのほとんどが第2次世界大戦直後に困窮に陥るわけです。第1次大戦直後に日本の金持ちが大量に持ってきたんですが、第2次大戦直後にそういう金持ちがみんな没落するんですね。

戦前の金持ちってというのは、事業を持っていたというよりも、お金とか株、土地とかを持っていた人が多くて、戦後の財閥解体、農地解放が直撃するわけです。それだけではなくて、新円切り替えで古い紙幣を全部、銀行に入れなくちゃいけない。そして、新しい円になるんですが、それを引き出すのに制限がある、というようなことがありました。それから、一番の打撃が財産税と言いまして、累進税率で、一番のお金持ちは財産の90%を取られる。そういう、とんでもない税金があったんですね。しかもそういう税制だけでなく、インフレもあった。資産家たちは、要するに手持ちの現金がないんで、次々と身の回りの不動産、動産を放出しなくちゃいけない。「筍生活」と言って、筍の皮を1枚1枚と剥くように、手放すわけです。太宰治の『斜陽』から「斜陽族」という言葉も生まれます。そういう中で、美術品がたくさん、市場に出て来る。しかし、そういう時にそれを買おうとしたのは、ほとんど一人だけだった。それが、石橋正二郎であるということなんです。石橋正二郎は何で買えたかというと、さっきも言いましたように、彼も随分、苦境に陥ったんですが、とにかく、タイヤ生産を続けることが出来た。そして、タイヤってというのは、もちろんスポーツカーのタイヤではなくて、バス、トラックのタイヤであって、それは戦後の復興の物資として、非常に重要だったんですね。だから、いくらインフレがあっても、いくら財産税があっても、毎日毎日現金が入って来るという強みがあった。そして彼には、西洋美術が欲しい、美術館を作りたいという決意があった、そういうわけなんです。それともう一つ忘れてはいけないのは、その時期は、国際的な価格に比べると、国内での西洋絵画の価格が、うーんと低かったんですね。1946年に、石橋正二郎は原家からセザンヌの《サント＝ヴィクトワール山》を買うんですが、その時の価格が37万円であった。当時の為替レートで換算して、ちょっと換算しにくい面があるんですが、一番高く想定しても二千何百ドルっていう感じで、当時のセザンヌの国際価格はほぼその10倍だったんです。つまり、外国の画商は日本まで来て絵を買おうなんて思わなかった。日本にそんな絵があるなんて思いもしなかった。ですから、凄く安かったんですね。それが、1955年ぐらいになると、外国の画商、パウルズ画廊とか、ウイルデンスタイン画廊がコンタクトを付けることに成功して、

その時から、国内の価格が急激に上がって、そして、次々と名画が、セザンヌ、ドガ、ゴッホの本当の名画が海外流出するようになるんです。しかし、その時までの10年間に、ほぼ石橋正二郎はこの西洋美術のコレクションを仕上げていたってということなんですね。

ちょっと長くなりました。要するに、大きな戦争の最中、あるいは直後には古いコレクションが壊れて、新しいコレクションが生まれる、そういうことがよくあったわけです。しかしこのブリヂストン美術館のコレクションは、敗戦国に新しいコレクションが生まれた、という非常にまれなケースであったと言えることが出来るだろうと思います。そして、こういう風に、明治以降のコレクションが、偶然が作用したわけですが、この石橋正二郎に買い取られた。日本にある古い西洋美術コレクションというのは、美術館としては三つあるわけです。このブリヂストン美術館以外に、国立西洋美術館、そして大原美術館。国立西洋美術館というのは、松方幸次郎一人のコレクションで、大原美術館は大原孫三郎一人のコレクション。しかし、このブリヂストン美術館というのは、明治以来の林忠正から始まって、たくさんのコレクターたちの鑑賞眼の集積であるわけです。そういう意味で、この「印象派の絵はどのようにして日本に来たか」を語るのに最も相応しいように思うわけです。長くなってしまいました。どうも、有り難うございます。

[*クリックすると、大きい画像を表示します。](#)



黒木竹子、モネ夫妻、クレマンソーらの記念写真



セザンヌの絵の前で微笑む武者小路実篤



50年前のブリヂストン美術館の情景